



きらきら Eyeランド
JA庄内みどり

安全・安心をお届けします。

令和2年2月10日

グリーンプロジェクト情報 第1号

発行：庄内みどり農業協同組合
協力：酒田農業技術普及課

令和2年産の春作業まであと少し！ 作業計画に基づき健苗育成に努めよう！

近年、夏の猛暑、高温といった気象変動により生育後半の稲の活力低下がみられます。天候に左右されない稲づくりを継続するために、積極的な土づくりで地力を向上させましょう。また、作業計画を確認し健苗の適期移植で初期生育確保に繋げましょう。

令和2年度 水稲育苗作業計画

作業名	作業月日
塩水選	3月27日(金)～29日(日)
種子消毒	3月28日(土)～30日(月)
浸種	3月29日(日)頃 ※2週間程度までとし、必要以上に長くしない。
催芽	4月9日(木)～
播種	平坦4月11日(土)～15日(水), 中山間4月18日(土)～24日(金)
田植	平坦5月8日(金)～12日(火), 中山間5月15日(金)～20日(水)

春先は作業が集中します。正確な記録の為、農作業記録野帳への記帳を忘れずに！！

技、其の一 「ばか苗病」対策のポイント「共通事項」！

■周辺環境

- ①作業場所やその周辺から伝染源となる稲わら、籾殻、米ぬか、粉塵等を除去し、十分掃除をする。
- ②昨年「ばか苗病」の発生が見られた場合は、種子消毒、浸種、催芽に使用する機器並びに容器等（桶、育苗箱、※催芽機）はすべて「イチバン」（500～1,000倍液で瞬時浸漬または散布）等で消毒する。また、マルチや有孔ポリは再利用せず更新する。※催芽機は希釈液を循環させる。

■塩水選・種子の準備

- ①塩水選でより良い種子を！

品種	塩水選の比重	水10ℓ当たりの目安	
		塩(kg)	硫安(kg)
うるち	1.13	2.1	3.0

☆塩水選後は、水道水で良く洗いましょう。

☆温湯消毒をする方は塩水選をしないで下さい。

- ②塩水選の際には、必ず採種地の確認をして、忘れずに産地・採種地ナンバーを生産記録書に記入しましょう。
- ③品種の混入に注意して下さい。
※催芽袋での色分け、名札等でハッキリ確認できるようにしましょう。
- ④催芽袋に種子5kgずつ、ゆとりを持たせ詰める。

■浸種・催芽

- ①浸種は、屋内または日陰で行う。ハウス内での浸種は水温が高くなる傾向があるので絶対に行わない。また、直射日光による急激な温度上昇を避け、外部からの異物混入を防ぐため、容器には必ず「蓋(ふた)」をする。
- ②浸種は、水温10～15℃未満を確保できるように3月29日頃から開始する。(酒田アメダス平年値で最高気温10℃を超える頃)また、水温が低い場合は、開始時にお湯を加えるなどし、水温が10～15℃未満になるように調整する。低水温(5℃以下)は発芽率低下を招き、高水温(15℃以上)は「ばか苗病」のリスクを高めます。
- ③浸種水温は15℃未満とする。浸種期間は積算水温120℃までとし、必要以上に長くしない。浸種水量は種子が露出しないよう十分確保する。
消毒方法の異なる種子は同じ容器で浸種・催芽しない。(詳しくは裏面参照)
- ④催芽温度は30～32℃とし、温度が低すぎても高すぎても「ばか苗病」の発生を助長する為、温度計を設置し確認する。(催芽機を使用する場合も過信せず、温度計で必ず確認する。)

■育苗管理

- ①育苗施設及び周辺では、生わら、籾殻を使用しない。
- ②生焼けのくん炭を育苗床土に使用すると「ばか苗病」が発生しやすくなるので、完全に炭化したものを使用する。
- ③育苗期間中の温度は、出芽時(30～32℃)、緑化期(昼:20～25℃、夜:10℃以上)、硬化期(昼:15～20℃、夜:5℃以上)を目安とする。温度が高いと「ばか苗病」の発生が多くなるので、温度管理を徹底する(「ばか苗病」の発生リスクが最も高い温度は27～30℃)。

技、其の二 薬剤による種子消毒の方法！

種子消毒剤にはテクリードCフロアブルを推奨します。
(スポルタック乳剤に耐性イネばか苗病菌が確認されております。)

■テクリードCフロアブルの使用方法

- ①水温は 10℃以上～15℃未満を厳守する。(天気予報を確認して比較的暖かい日に実施する。)
- ②太陽光が直射する日向では、薬液の温度が上がったり、薬剤成分が分解したりする為、屋内または日陰で行う。
ひなた
- ③薬液量は、種子乾粒の2倍以上の容量の希釈薬液を準備し、「よくかき混ぜる」こと。
(乾粒 10kg の場合、20ℓ 以上の薬液が必要。)
- ④薬液の倍率は、水 100ℓ に対し薬剤 500ml の 200 倍を厳守し、24時間浸漬する。(乾粒 50kg 分)
- ⑤薬液に漬ける際は、催芽袋の一つ一つ中まで薬液が染み渡るように、3～4回ゆすってから容器に沈め、24時間浸漬する。
- ⑥消毒終了後は風通しの良い日陰で種粒袋を2～3日吊るし、種粒の表面に薬剤が固着するまで乾かすと防除効果が高まる。(※例年、ばか苗病の発生が多い場合は、実施する。)
- ⑦浸種は、種子乾粒の2倍の水道水(10kgあたり20ℓ)に静かに浸す。(水を動かさない!) 薬剤効果の安定を図る為に、浸種開始3日間は水の交換をしない。その後は3日に1回程度交換する。また、種粒に固着させた薬剤がはがれないように、水交換は静かに行う。(流水には浸漬しない)
- ⑧浸種期間中に、循環式催芽機やエアレーション付の水槽などを使用すると、黒色の粘性物が発生する場合がありますので使用しない(水を動かさない)。
- ⑨催芽機による「催芽」は、機械を過信せず温度計を設置し確認する。

技、其の三 温湯消毒種子の取扱方法！

- ①温湯消毒後は直ちに水道水を用いて浸種する。直ちに浸種できない場合は脱水した後、衛生的で風通しのよい冷暗所に広げて保管し、適切な時期に浸種を開始する。
- ②浸種は、種子乾粒の3倍以上の水道水(10kgあたり30ℓ以上)とし、菌を増殖しにくくするため、2～3日に1回は水交換する。
- ③温湯消毒した時点の種子は殺菌されているが、その後の不衛生な管理や温度管理で「ばか苗病菌」が付着する可能性があるため注意する。
- ④温湯消毒と薬剤消毒を行った種子を併用する場合は「浸種・催芽・播種」は、別々に取り扱う。

※もち米は温湯消毒処理を行うと発芽率が低下する傾向があるので留意する。

種子と一緒に配布されている『作業チェックリスト』を活用して「ばか苗病」の発生を未然に防ぎましょう！！

技、其の四 気象変動に左右されない土づくりを！

土壌の pH は土づくり資材の使用減少により年々低下してきています。pH の低下は稲わらの腐熟を遅らせ、田ワキの原因となり初期生育確保の妨げになります。また近年は夏の猛暑、高温が常態化しており、特に地力が低い圃場では稲の消耗が激しく凋落が見受けられます。積極的な土づくりで地力を向上させ安定多収をめざしましょう。

(税込)

資材名	施用量 (kg/10a)	参考価格 (円/20 kg)	備考
農力アップ	60	1,254	ケイ酸・苦土・微量元素を含有した新総合土づくり肥料
天の恵み 14号	100	935	ようりん [®] とケイカルが同時散布できる省力銘柄。混合割合は、ようりん1(20%)：ケイカル4(80%)
てんろ石灰	60	726	ケイ酸や微量元素を含む。主に pH の矯正を目的とし効果の持続性が高い

※春散布の場合は耕起前までに散布しましょう。

★ 次号の発行は3月10日です！